

特42

673

祭典作法習禮書全

014071-000-5

特42-673

祭典作法習禮書

木下 美重/編

M29

ABB-0327



祭典ハ國家彝倫ノ標準タルモノナ最モ

齊肅恭敬ヲ盡スヘキハ論ヲ俟サルナリ然リ

而シテ其國家彝倫ノ標準タル祭典ヲ行ナヒ

齊肅恭敬ヲ盡スニハ其式書ニ則ラサレハ何

ヲ以其實ヲ舉クルヲ得ンヤ方今式書ハ式部

寮ニ於テ撰ハレタル神社祭式神宮ニ於テ定

メラレタル明治祭式等アリテ官國幣社ヨリ

府縣鄉村社ノ祭典ハ之ニ則リ執行スト雖凡

其書タル大綱ノミヲ舉テ法式等ノ細目ハ略



サレタレハ初學ノ者ノ所作實踐履行上ニ不  
便ヲ感スルコト多シ故ニ今回神職取締所ニ  
於テ初學ノ者ノ爲メ大綱ヨリ細目ニ至ルマ  
テ之ヲ詳記シ一本ヲ編纂セシテ決議シ以  
テ編者ニ囑托セラル編者素ヨリ學ナク識ナ  
ク材ナクシテ其任ニ適セスト雖氏懇篤ノ委  
托點止シ難キヲ以テ黽勉之ニ從事シ先ツ神  
社祭式ヲ大綱トシ其細目ニ至リ一事一業ト  
雖氏敢テ編者ノ杜撰ヲ用井ス古今ノ式書ヲ

參照採擇シ号テ祭典法式習禮書トス固ヨリ大  
方ノ識者ニ示ス爲ニ非ス初學ノ者之ノ書ニ  
據テ以テ祭典法式ヲ修得セハ齊肅恭敬ノ道  
ヲ盡スニ於テ庶幾ハ標準ヲ誤マラサラン歟  
尙ホ誤謬脫落等アラシニヨリ冀クハ博識ノ  
諸賢教示セラレハ編者ノ幸甚ニシテ他日訂  
正増補ヲ爲シ完成ヲ期スト云爾

明治廿九年九月

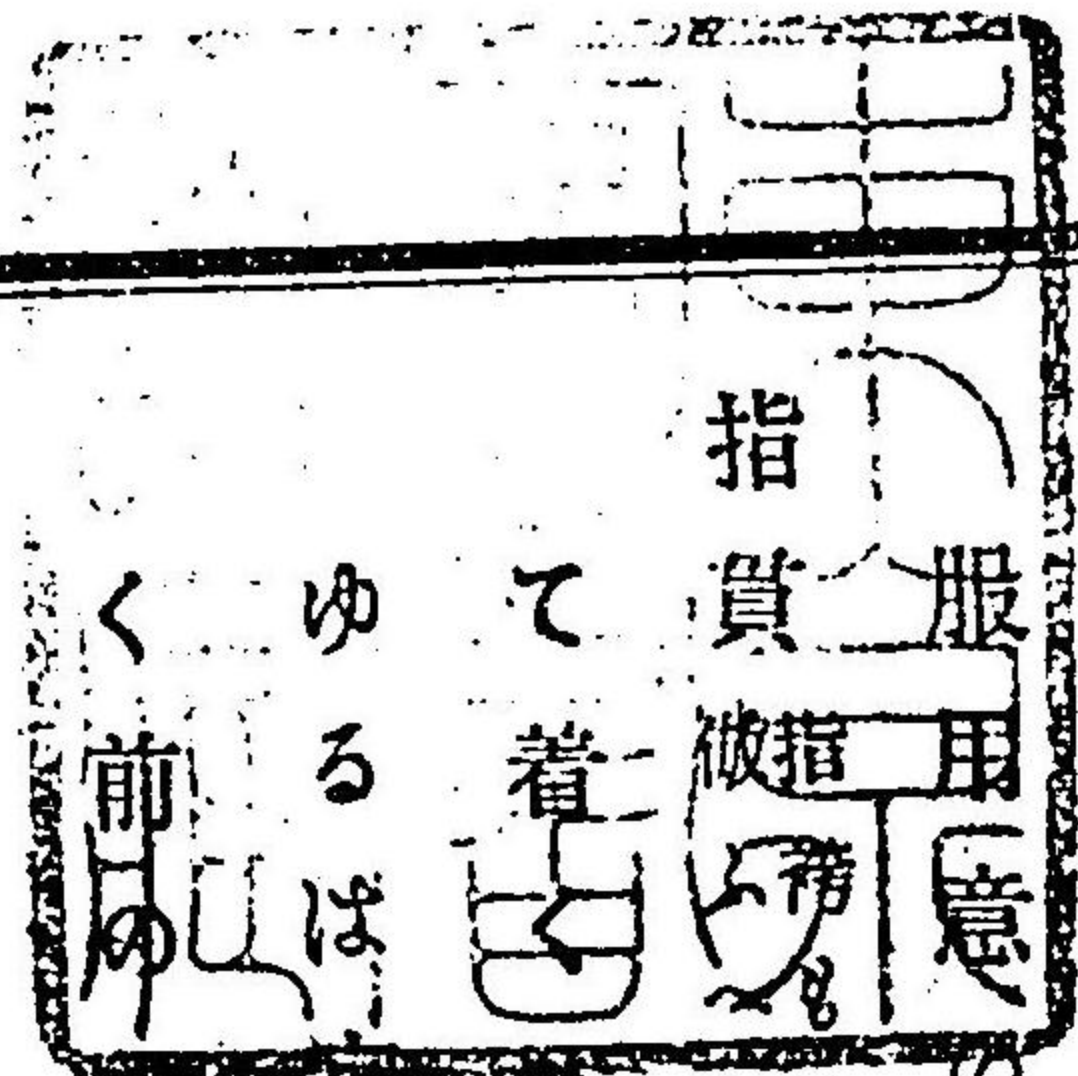
編者等謹識

参取書目

園大曆記	貞觀儀式	北山抄
桃華藥葉	齋居通	日向草
神宮明治祭式	神事略式	祭典式
祭典作法	祭式摘要	祭典習禮書

祭典法式習禮書

祭典を執行するに於ては先づ服装を整理すへし依て着



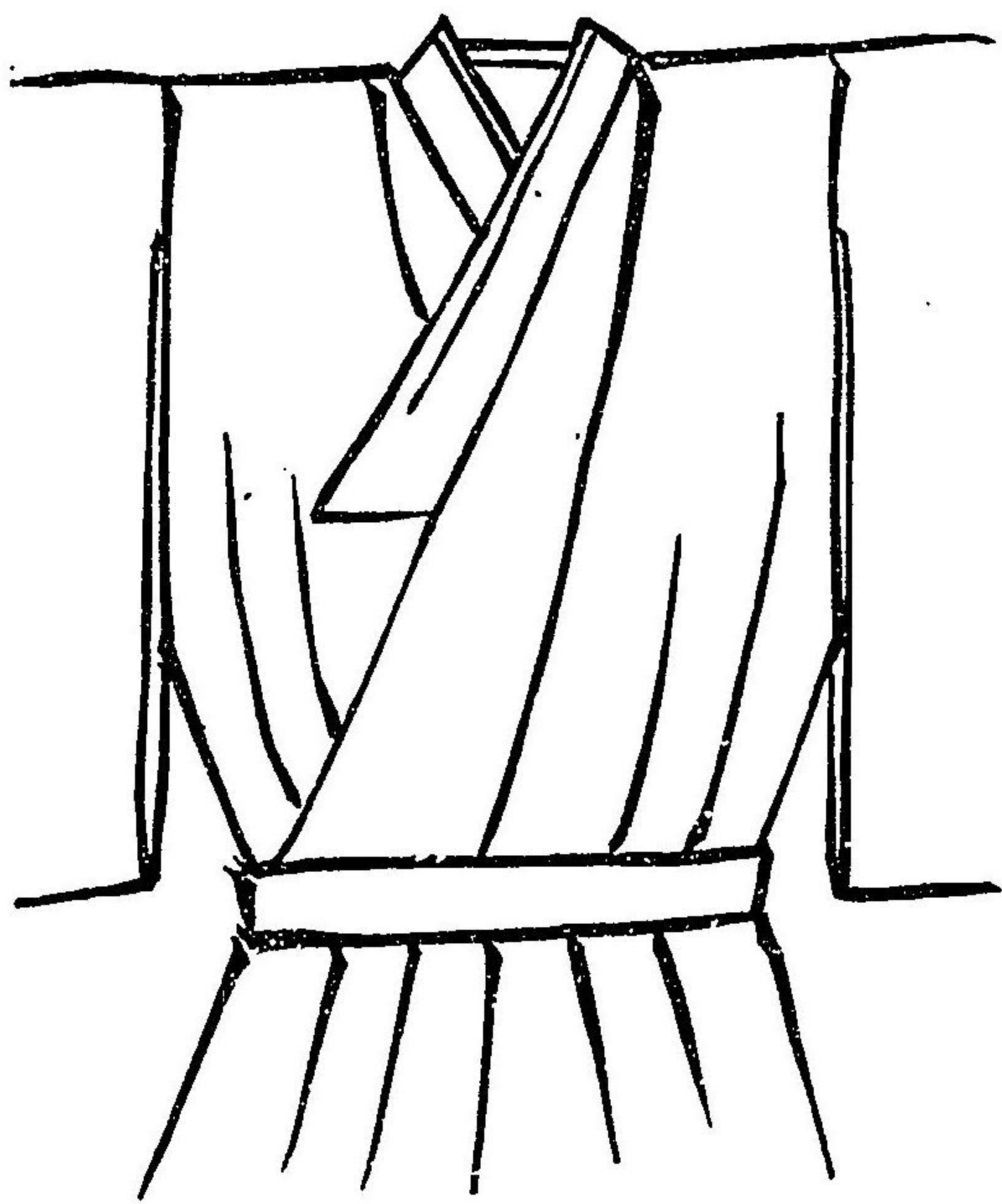
服用意の大略を示すこと左の如し

指貫は下拵りを高くして裾を地より二寸計あけて着し低くして地をすり高くして襪足袋の多く見ゆるは直しからず下服の裾を指貫の内にて左右ひとく前ゆ方にまはして指貫の裾のふくらかなるやうにす

へし測みたるは甚見にくし  
単衣は前にも後にも扇形に襷をとりて着くへし

襷をとらされは脇の下にて前後の端重り合ひてよろからす

單衣を扇形に襲取たる圖

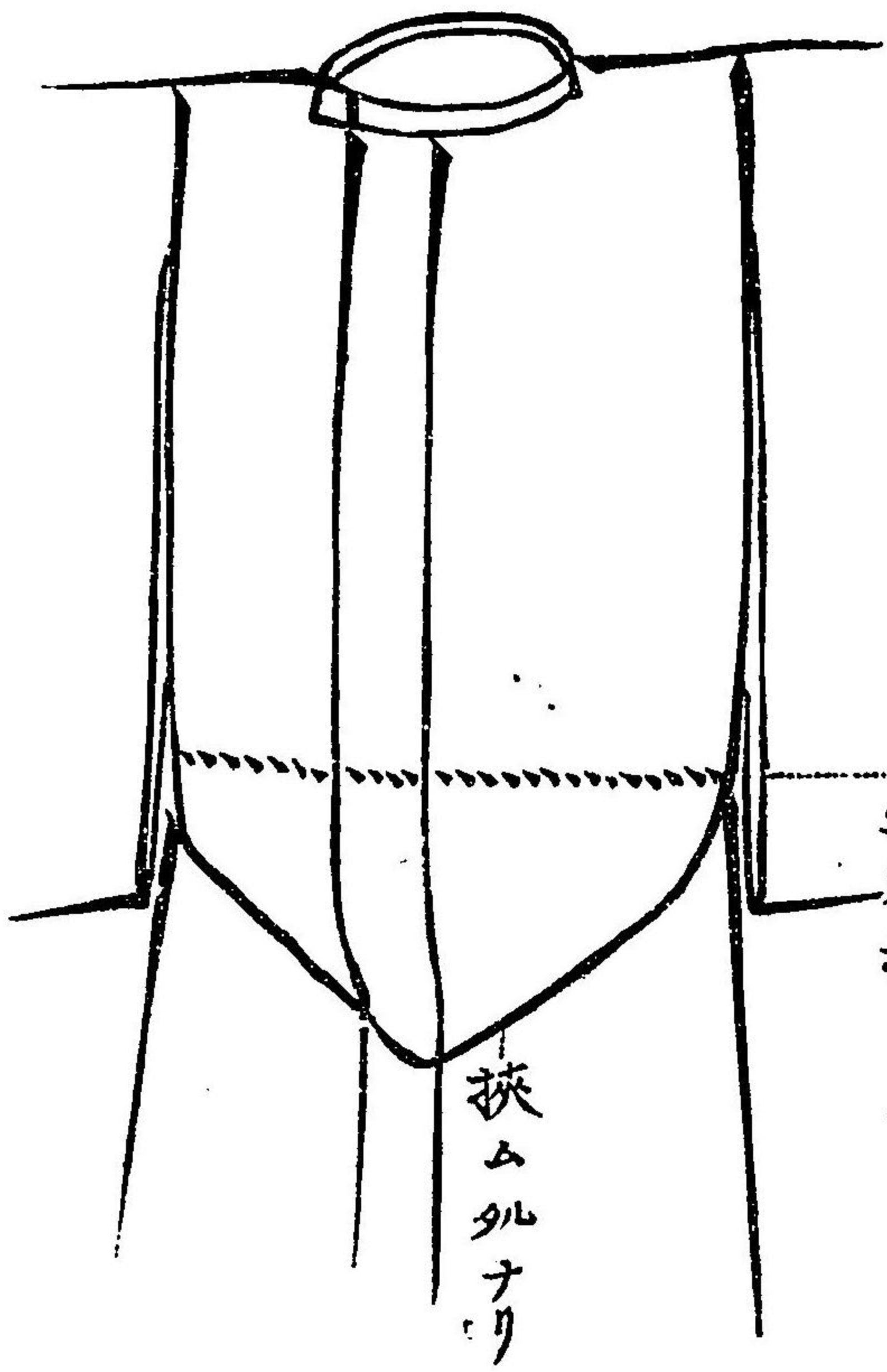


齋服正服亦是もは裾を五六寸あくへし高きは卑ひかしく見みえ小紐を  
は固く引しめ結ひ其上に小帶を後の方袋の如き垂れの  
下より二重又は三廻りにて前の垂れの下に結ふへし然らし

テ前ノ垂レノ下ノ方ヲ扇形ニ

此処折目ナリ

齋服ノ圖



狭ム処ナリ

左右より折込みて裏に折返し小帶に固く狭込むへし緩  
きときはうら抜けして不体裁になるなり

狩衣は前の裾を七八寸あげ帯は高くしむへし低き時は背  
面見にくし又緩き時は自然下る事あり

冠と風折烏帽子とは前の方を低く後は少し上りめに着け


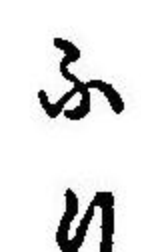
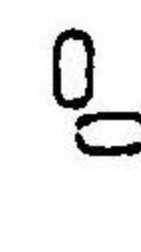
たるをよいとす冠には木綿笠を懸ることもあり多くは神宮にて之を用ふ其法麻笠少計を以て冠の類より廻し後の方よて結び其末を垂るゝものなり日影笠(又は糸)は選宮神幸のとき神職之に用ゐるも妨おし心葉は神梅花等冠の巾子に結付るよし故實書に見ゆたりに参考此爲に之を記す

次は座法歩法の大略を示す左の如し

正座法は右膝を先に折じき左の膝を後に折り敷神前に向ひて左の方に

座すへきものは左膝を先に右膝を下にて右の足の膝を後に折り敷く凡て反對トスしりた臀下にて右の足の大指を下にし左の足の大指を上し重ね左右の膝間膝を入れる、を法として少し開き小腹こはらを前に出し臀を後へ出し笏を臍に當て、俯さず仰かす正面に端座すへし

歩法は左へ向くには左足を引き右へ向くには右足を引

くふり向くには上字形   曲尺形 

〇にすへし行歩の時は正座法の如く身を固め俛さす仰かす正しく立ち少し腰を入る、の意を用ひて左足よりすらせあげ急はやからせ緩ゆるからす徐々ゆると歩むへし

次に諸作法の心得大畧を示すこと左の如し

笏は常に右の手に持なり楮拜のときは勿論祓戸又は

神前に列せは兩手にて持ち左の手に上にして右の手に臍のあたりに下にして半重ねて持つへし臍のあたりへ當つへし是を正笏と云ふ行事に臨む時は懷中するか或は右の腰に挿むか庭上までは椅子の上に置き殿上にては右側の敷薦の上に置くへし笏を懷中するには齋服(正服)の前上はべの裡に輪

形の絲を縫付け置き之に笏の本を指と云は笏落さるものなり之も亦故實なりと云

揖 揖とは両手にて笏を持ち、臍のあたりに當て、腰を折るなり。○拜と揖とは大なる違ひあり、よく心を以て誤ることなかれ。

拜并拍手 拜とは神前に向ひ正しく立て、両手は笏を持って先づ右の足を引き、跪き次に左の足を引、て正坐し、笏を両手は持ち向へ指し、膝前に下して床に着け、頭を下け、願を大指につけ折れか、むを云ふこの時尻あがらず脊高からず平直ならんことを要す。右の如く座して二度するを再拜と云ひ、四度するを再拜兩段又兩段再拜ともと云ふ。拍手は一度拜する時には手を二つ拍ち二度拜する時は四つ拍ち四度拜する時は八つ拍を定則とす。凡そ拜揖とも頭を下ける間は通常三息の間をよるしと云ふ余り長きは作法の妨とあり短きは敬禮を欠くの恐れあり故に斟酌宜きに從ふべし。

古書に再拜とは笏を持ちて直立し神前を見ること三息にして、笏を身の中央に當て、左手を右手に重ね合せ、笏を兩目と均しく指上げ、下の方へ押降して身を屈め、先づ右足を少く引、て平伏する也。此間三息計にて又左の足を先引、て正しく立ち、初の如く笏を目邊に指上げ、押下げ身を屈め平伏す。息數は上に同じ、右の再拜を二度するを再拜兩段と云ふ。拍手の數は坐拜と異なることなむ依て適宜此法に據るも妨げなく、雖方今普通行ひ來りたる座拜の方を本條に擧げ用ゐたるなり。

小拜 小拜とは笏をあげずして、持なから、両手をつき拜するを云ふ。手は拍たさるなり。

沓揖 沓揖とは其坐するトキナ或は圓座の前に至り、両手にて

笏を持ち臍のあたりに當て、一揖して沓をぬくなり○  
又沓を着くるときは先沓を着けて一揖するなり笏揖は  
庭上の式なり沓を脱ぐには一足に踏揃へ片足宛靜かに脱くへ然ら  
は過つて之を用ゆへし然せされ  
を摺つて之をすり是又故實あり

座揖 座揖とは先軾或は圓坐に坐し笏を兩手にて持ち腰  
を折り頭を下くるを云

拍手 拍手とは手を拍なり笏を坐の右に置くか又口懐中ずる

か或は右の腰にさして拍拍手を俗にかしはてと唱ふるこ  
とあり誤謬の甚しきものなり祭

典に預るものか、る  
稱唱をなすへからず

短手 短手とは音ヲ立てすして拍つなり或は一度拍つを

短手と云ふ

忍手 忍手とは葬祭の時音を立てすして拍短手とは  
異なり

膝行 膝行とは跪踞して行くとなり此時は笏を右の手に

持なり詳細祭式の所  
参照すへし

扱拜の仕様をひとわたり記せば二つあり

一先沓揖 次坐揖 次再拜 次拍手 次坐揖 次沓揖な  
り

二先沓揖 次座揖 次再拜兩段 次拍手兩段 次坐揖  
次沓揖なり

右の一は畧なり 二は尋常なりこの○沓揖○座揖○拜  
○拍手○坐揖○沓揖の六を合すれば拜式具はるなり  
平伏 平伏とは文字の如く平らかに伏すなり其状は坐し  
なから股をはむかり腹と顔を下へ着けてあまり頭を  
さげぬ状にすへし



供物 供物とは神饌を云ふ其奉る状は高杯ならば左の手  
にて柄をにきり右の手にてふちを持ちて次々に傳供す  
へ一三方ならば母指と食指とにてふちを持ち中指と無  
名指と小指とを穴のところへ入れて持つへ一

祝詞を附すること 祝詞の後取之を懐中して進み祭主に

附す玉串の如く持行ものにはあらず

神幸の時には祝詞袋に  
云モノアリ祝詞ヲ入れ

紐と付け後取之と類にそかけ供奉し行く又左の後肩を袋の上にて前  
下紐を右の袖下より巡して左肩の上より巡し來りたる上紐と合せて前  
にて結び負ひ行く ○詳細祭式の所  
こどもありとそ

玉串を附すること 玉串を附するは後取の者假案より玉

串を左右の手にて

我左を上とし  
右を下とし持出齋主或は副齋主の前に

進み一揖して玉串を持ちへ

我右を上とし  
左を下とし渡すへし

齋主心得 齋主は祭典役員中の重任なれば心を静め万事

整肅にすへ一

祝詞を白す時は祝詞を後取より受取り笏に持添へて再

拜し笏を右の側に置き

後取なきときは懐  
中より祝詞と出す我左の方にて開き

正面に持巡らし二つに折り左の手を上にし小拜して開

き少しくうつむきて白すへ一叔白し終らは又正面にて二

つに折り小拜して我左の方に移して巻き終て右手に笏

を取りて笏に持添へて再拜して後取に渡すへ一

後取なき  
ときは懐

中すへし尙祭式  
の所参照すへし

副齋主心得 心得齋主に同じ

祓主心得 祓主は祓詞を白す時齋主の祝詞の作法に同じ

但し祓詞は少し高く差上げて白すへし

大麻者心得 大麻者は神饌及齋主以下を祓清むるものな

れは心を清くして祓ふへい○本儀は一人つ・祓ふへし  
鹽湯者心得 大麻者に同し

傳供長心得 傳供長は神饌を供ふる者なれば専ら注意し

饌を穢さ、る様にすへい變の覆を取ることなれ○凡そ祭典は神

饌を献るを以て重要とす神饌を献するに付諸式の因て

起るものなれば此心得を以て靜肅恭敬を盡すへし但し

神饌を捧げ持ちたる時は神前を通行するも小膝を折り

敬禮をなすに及はす其儘通行すへし然らされは神饌を

覆す等の過ちありて却て不敬を來すものなり奉り終り

て通行する時は必ず敬禮すへい

魚の奉り狀は川背海腹と云ひて川魚は背を神前に向け海

魚は腹を神前に向け奉るべし

奏樂 奏樂は開閉扉及神饌献撤の間奏すへい

拜之後撤饌の前に奏するとあり之と終享の樂と云ふ又

祭官退出後奏することもあり此等の式は便宜に循ふべ

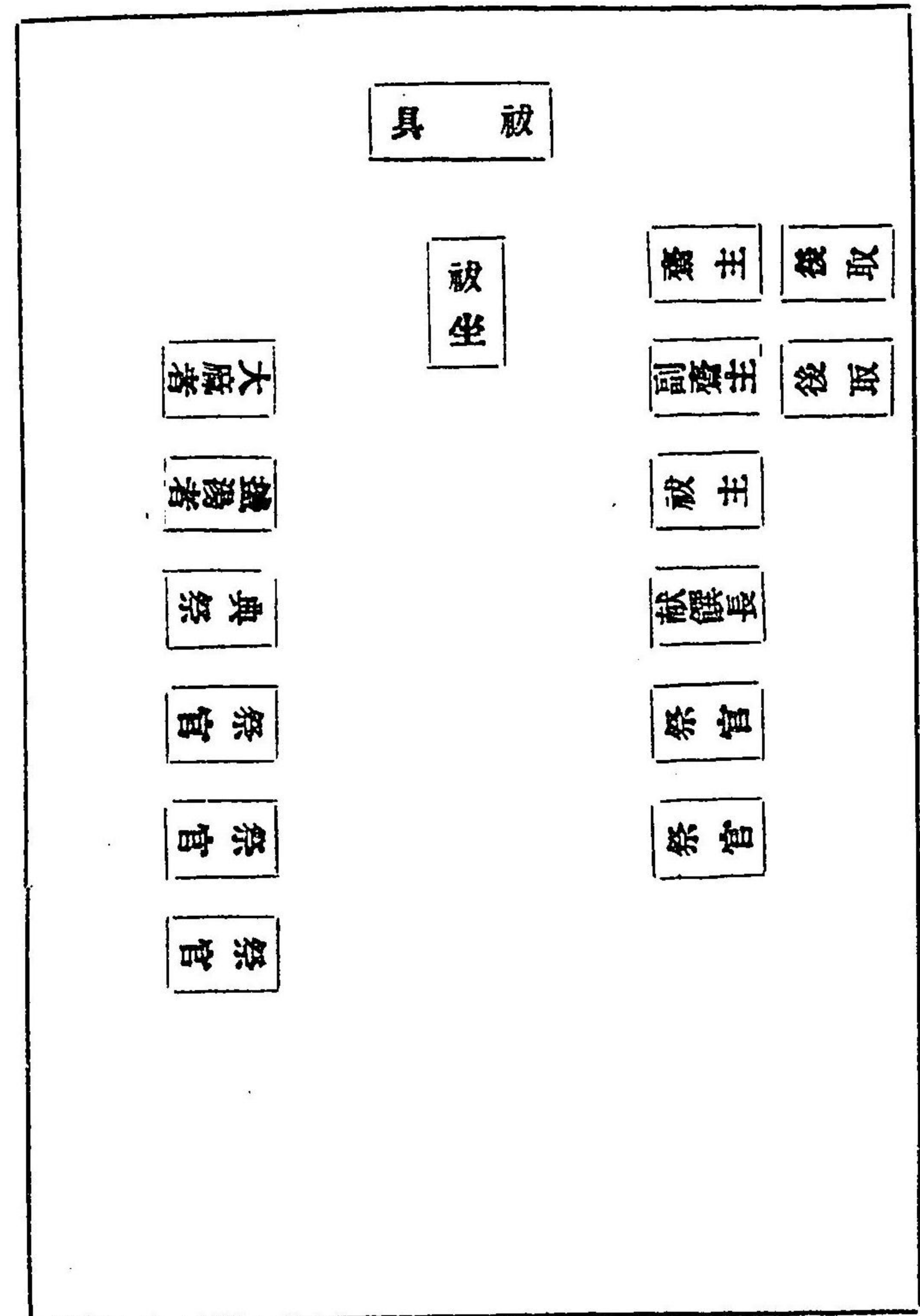
し

殿上尋常祓式

兼て高案に大麻盥湯をし  
案下には薦を敷く

先齋主以下祓の座に着く

祓殿着坐の圖



祭典執行すへき時刻になれば先づ齋主を始めて祭式に預るへき人々皆祓殿に着坐す祓殿の祓式を行ふ殿舎を云若しうれ無く口庭上に幄或は幕を張廻らして假に其所を定むへし拜殿に於てするも然るへく着坐す凡て自己の着すへき座前に至りて小膝廻し神前に向ひ右側に着坐する時は先づ左の膝をつき腰をそびへ体と共にし着坐すへし右の膝を廻し左の膝に並へて坐するを云ふ左側に坐する時は之に反す以下着坐法は之に倣ふへし

次祓主進みて祓の詞を宣る

祓主一揖して座を起ち起つ時は左よりし坐する時は右よりすれども起居進退とも神前の方なる膝を後にす以下祓坐の三尺位前に進み坐して一揖し膝行して祓座倣之に着き再拜拍手一揖し懷中なる祓詞を取出し笏に持二拜して傍に置き傍に置きの祓詞を左傍にて開き正面に持捧け二つに折り小拜し又正面にて捧けて音聲明朗に讀むへし讀み畢

て正面にて又二つに折り小拜し左傍にて巻きに笏をとり之  
再拜志て祓詞を懷中志置笏を手を二つ拍ち取笏を小拜膝退  
立て一揖本座に復じ一揖す

次大麻行事 大麻者一揖して高案の前に進み膝進凡そ小  
拜志笏を懷中志て案上なる榊の枝を取り左手を上とし右  
手を下にし一揖して膝退し凡そ起ち一揖し神饌の前に  
至りて一揖して榊を持替へ右手を上とし左手を下とし  
先神饌を左右左と打振りて祓ひ次に榊の左を上とし持  
替ふこと上に同志下皆齋主の座前に着き龜居一揖志て  
榊枝を復持替へ祓ひ順次に祭官一同を同上の手祓ひ畢り  
て高案の前に着き膝行等始榊の枝を案上に置き笏を取り  
一揖膝退立て一揖本座に復して一揖す榊枝は祓式終て海川  
に流捨るか又は焼却

すへし大麻行事者なき時は祓  
主之を兼るもさよたげあし

### 次鹽湯行事

鹽湯者一揖して起ち高案の前に進む其作業

膝進膝退總て大麻者に同し偕高案上なる鹽湯の壺或は盥の  
及揖笏等をとり両手に持ち先神饌の前に至て鹽湯の壺を左  
手に持ち右の手に榊の小枝を取り鹽湯に漬る左にう、  
ぎ又之をひたし右にう、ぎ又ひたして左にう、ぐへ志  
以下皆大麻者に同しう、ぎ終て壺を高案の上に置き本  
座し復す大麻者  
に同し

### 祓除受者の心得

大麻鹽湯者等吾前に來らんとせし兩手

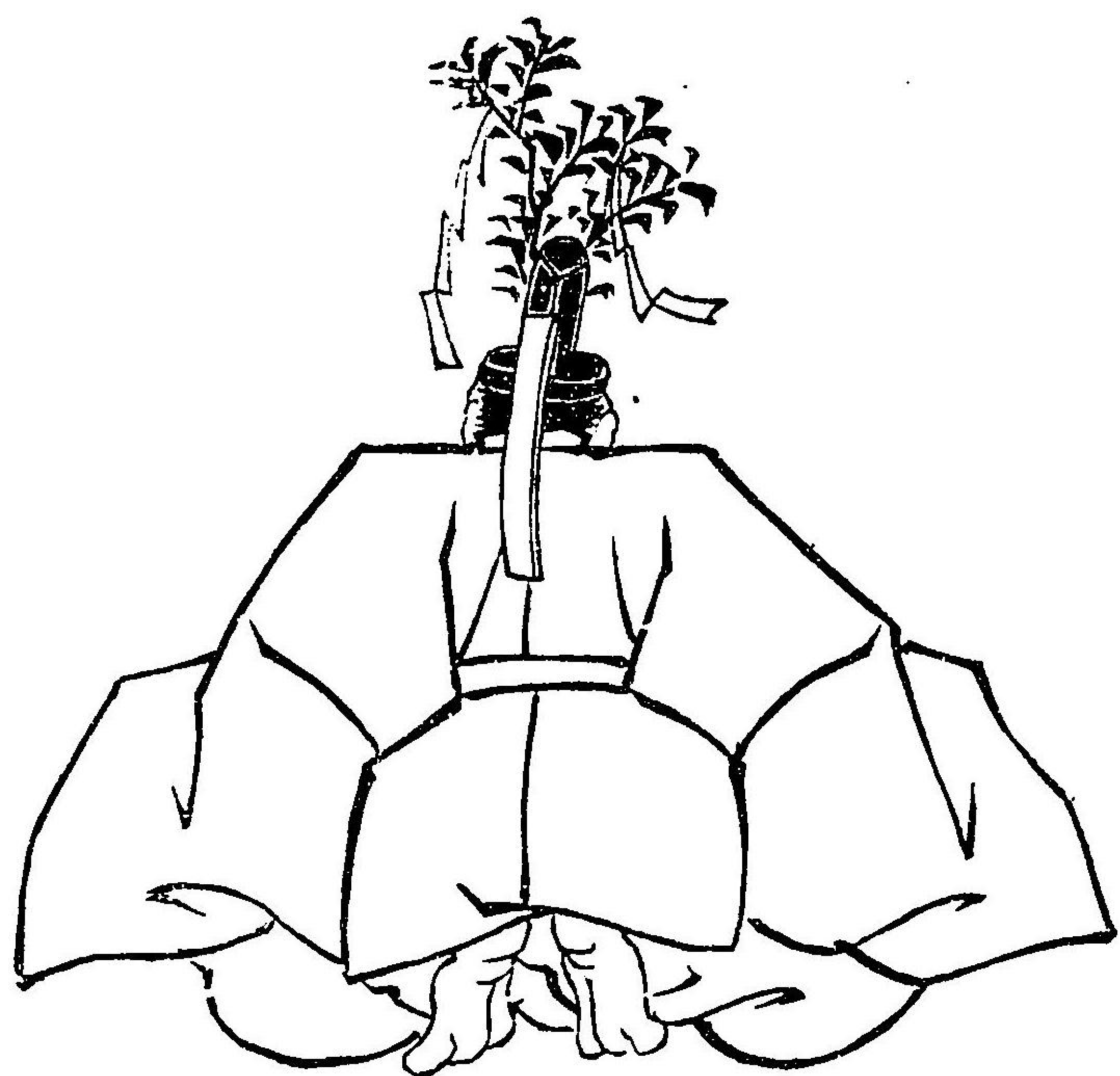
よて笏を持ち臍し當て、之を持ち大麻者等來り前に座  
し一揖する時其頭を下け之を受くへし祓終らば頭を舉  
げて元の如く正笏すへし

次退座 齋主以下一揖して齋主より立ち神前祭場に進むべし  
大麻者 榊枝を持たる圖左の如し

榊枝を取持つ圖



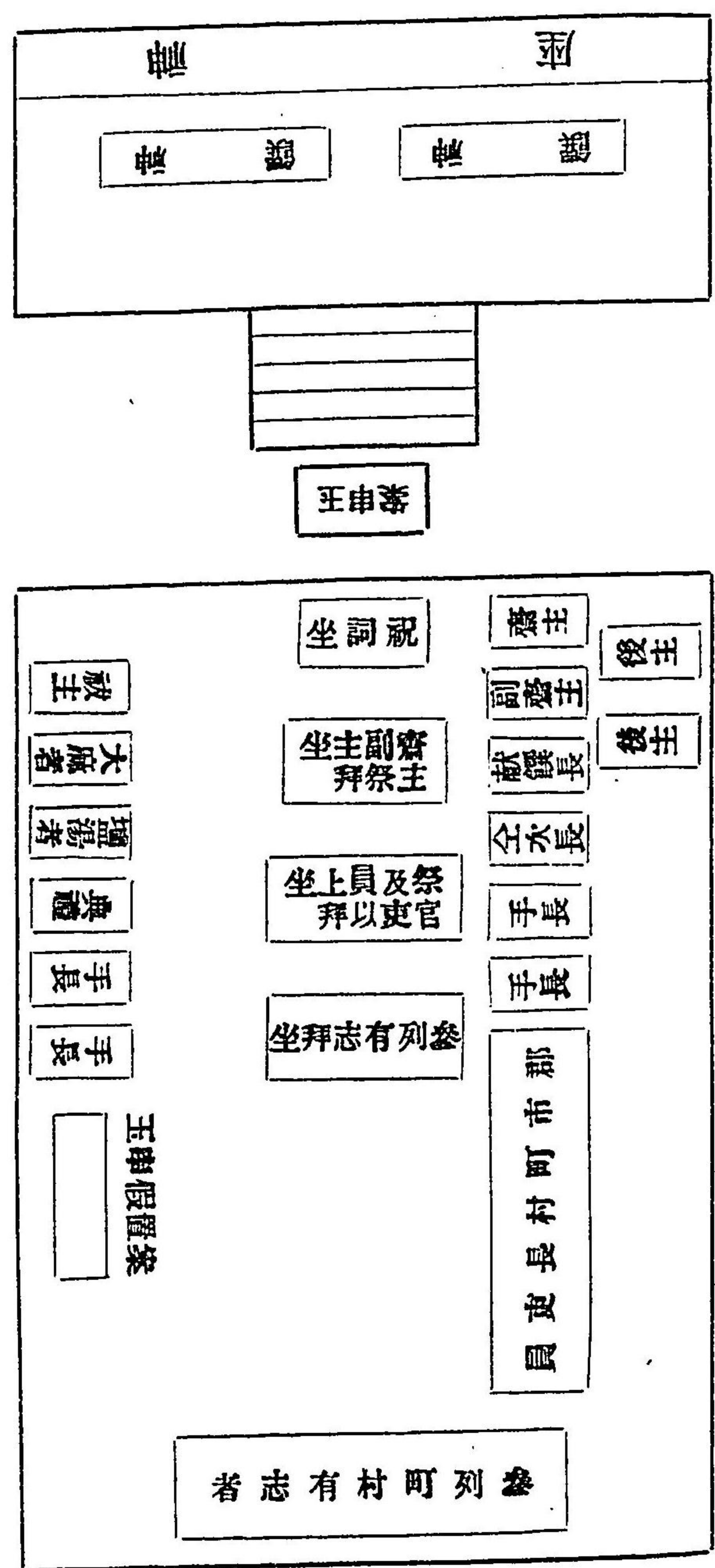
龜居の圖



殿上尋常祭典式  
齋主以下神前に参進

被畢らは齋主を始め一揖して座を起ち神前に向ひ一揖  
 圖面の通着座一揖正笏すへし若し着坐の折神前を横きり通行  
 したる(左何れにても)片足膝をつきし何れの邊まで下け少しく身を伏  
 して扱て膝を立てて神前を通すへし何れの時にも神前を通行する時は如  
 此すへし自然拜殿等にて被はす  
 すれば別段神前に進む及はす

殿上祭典着座ノ圖



次齋主副齋主殿に昇り再拜御扉を開く諸員一拜畢て再拜  
拍手警蹕管攝適宜此間奏樂樂人あきどきは皆

齊主副齊主一揖共に座を立て正笏左右に別れ並ひ進み

齋主我右副神殿階下に至り一揖齋主は階の左の右より

右足を先にし左足を後にし階段毎に足を聚め踏揃へ斜

めに横より順次昇るへ副齋主は階の右の左より左足を先に

し右足を後にし昇ること齋主に同じ同一に同階を昇り昇り

終りて一揖しはま様に座し一揖し齋主副齋主とも再

拜畢て膝行御扉の前より進み左右に分れて平伏す次に齋

主は一揖笏を座右に置き懐中より御鍵を出し御扉の錠

を開き一揖し先づ左の御扉を開く成へく靜に開き終て深

く謹み笏を取り平伏す此間副齋主以下次に副齋主一揖笏

を座右に置き進て右の御扉我左を開くこと齋主に同じ

終て笏を取り下倣平伏此間齋主次齋主副齋主共に頭を舉

げ一揖左右に別れ膝行し齋主配祀の左の方我右の御扉

を開き副齋主は同右の方我左の御扉を開くへし其式本

座の御扉を開くに同じ但一前を各一人にて配坐四坐六坐あ

るも扉を開くには此例に準すへし但齋主一人にして副齋

の御扉を開き次に左の配祀我右の御扉次に右の配祀我左の御扉を

開くへし閉つる時は右の御扉を先にし左より本座ト反對にすへし

終て齋主副齋主膝退はま様より退き坐し共に再拜拍手一

揖階を下る階段を降る足踏は昇階下にて一揖本坐に復す

但副齋主なき時齋主一人あれば階の昇降は総て右の方我左の方よりすへし又

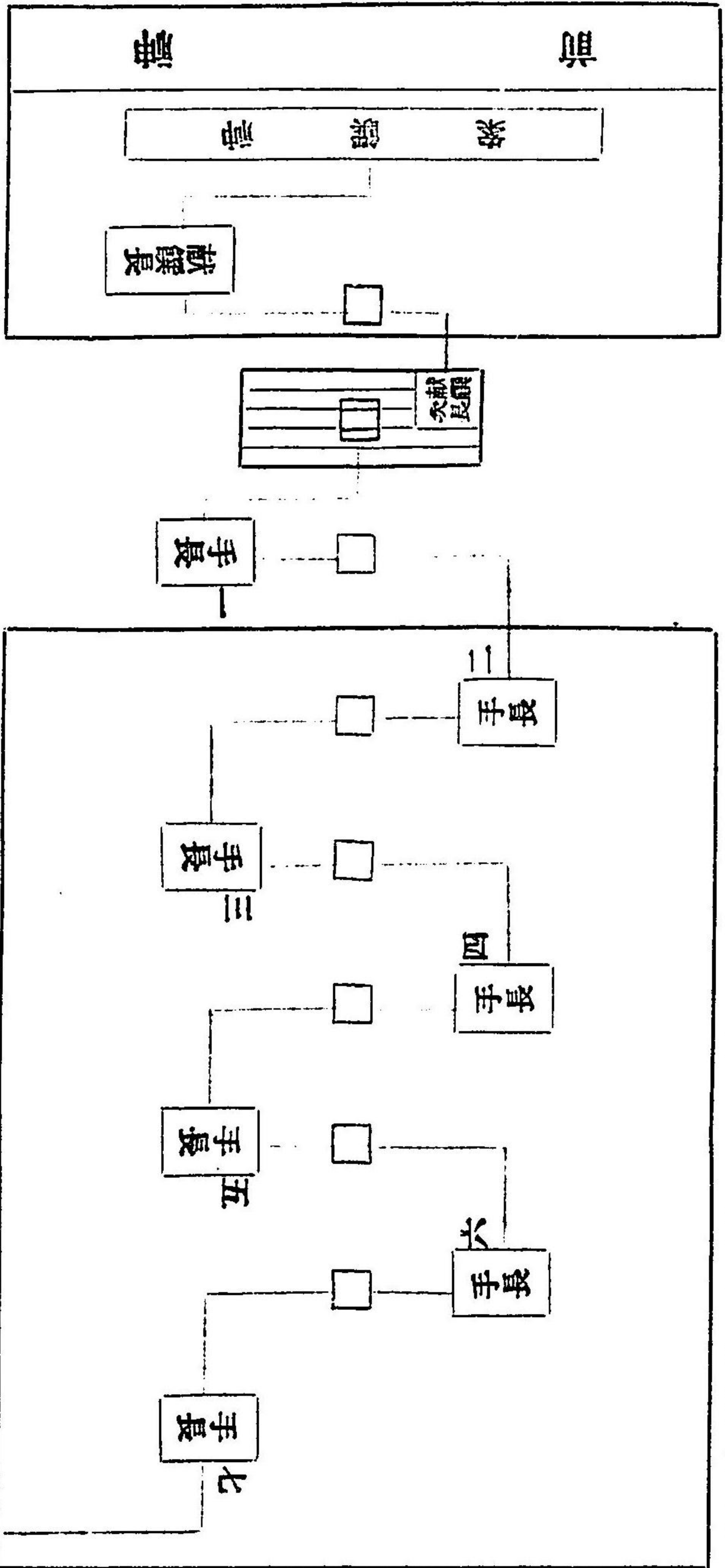
階段幅狭き時は左右の足踏揃ふるに及はす常の通りにて階の昇降をなすへし

奏樂は齋主座を起つときより本坐に復するまで之を奏すへし

次献饌長以下神饌を傳供す 此間奏樂

神饌傳供ノ圖

七の手長神饌を神饌所より捧げ出て、朱線の處を通り中央□印の處に左向我右に立つへし六の手長□の處迄進んで神饌を受取りて本の座の處まで引きて朱線の處を進みて□印の處にて五の手長に渡す五の手長受取渡は六の手長の例も同く



すへし其外は之に倣ふへし又神饌を渡し畢らば進路の通り退き歸りて元の坐に蹲踞し次の神せんの來るをまつへし

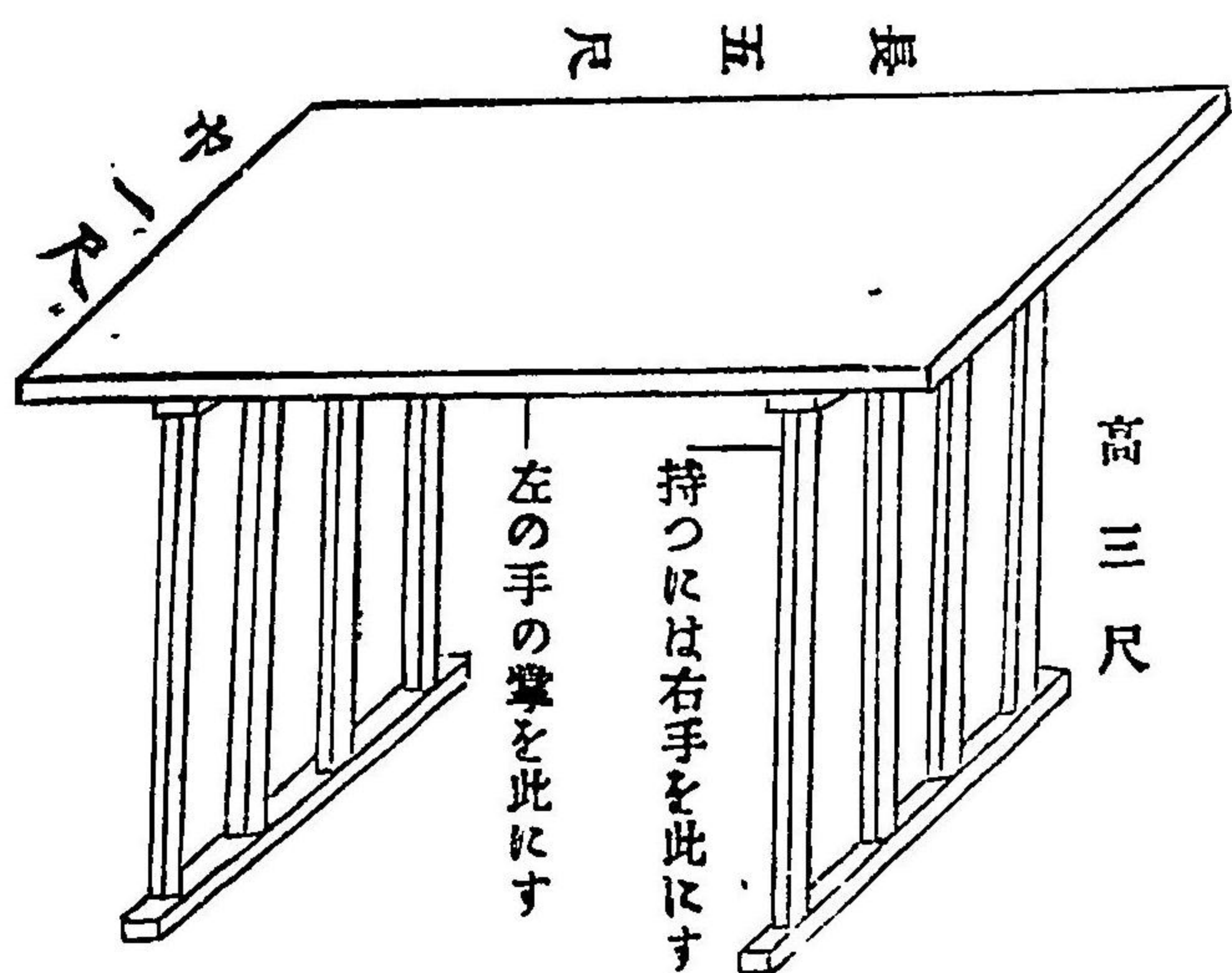
神饌傳供

獻饌長一揖して立ち神前階下の右の方我方左に進み一揖して階を斜に昇り我右の方を向き横はま椽に坐し神前二向ひ小拜神前の右の方我方左にうづくまり居るへし次に次長同く進みて階の中段にうづくまり居るへし次に次に以下の手長の者順次一揖して坐を起ち圖の如く千鳥並の形に進み列坐龜居但し其列座の距離の如きは祭場の廣狹と一揖し笏を懷中し手を握り指の方を上にし甲の方を下にし膝前に付き首を下げうづくまり居るへし授一同列坐し終らは神饌長以下一同一揖し畢りて末座の手長神饌所より順次に神饌を運び出す神饌を次々受取渡して神饌長に達す圖面参照すへし但受取者は先左手を擧げて三方の右は先つ右の手を引き次に左の手を引くへし先つ右の手を引くときは先方受取り確かに持居るや否を知らんか爲め少しく三方を引く



神饌案の圖

八脚高机



神饌備順の圖

十	八	六	四	二	一	三	五	七	九
水盥	野菜	鳥	海魚	盃酒	箸和稻	餅	川魚	海菜	菓

姫神に献りたる圖なり  
彦神ならば一と酒とし二を和稻菟稻とあすへし  
以下之に替るとなし

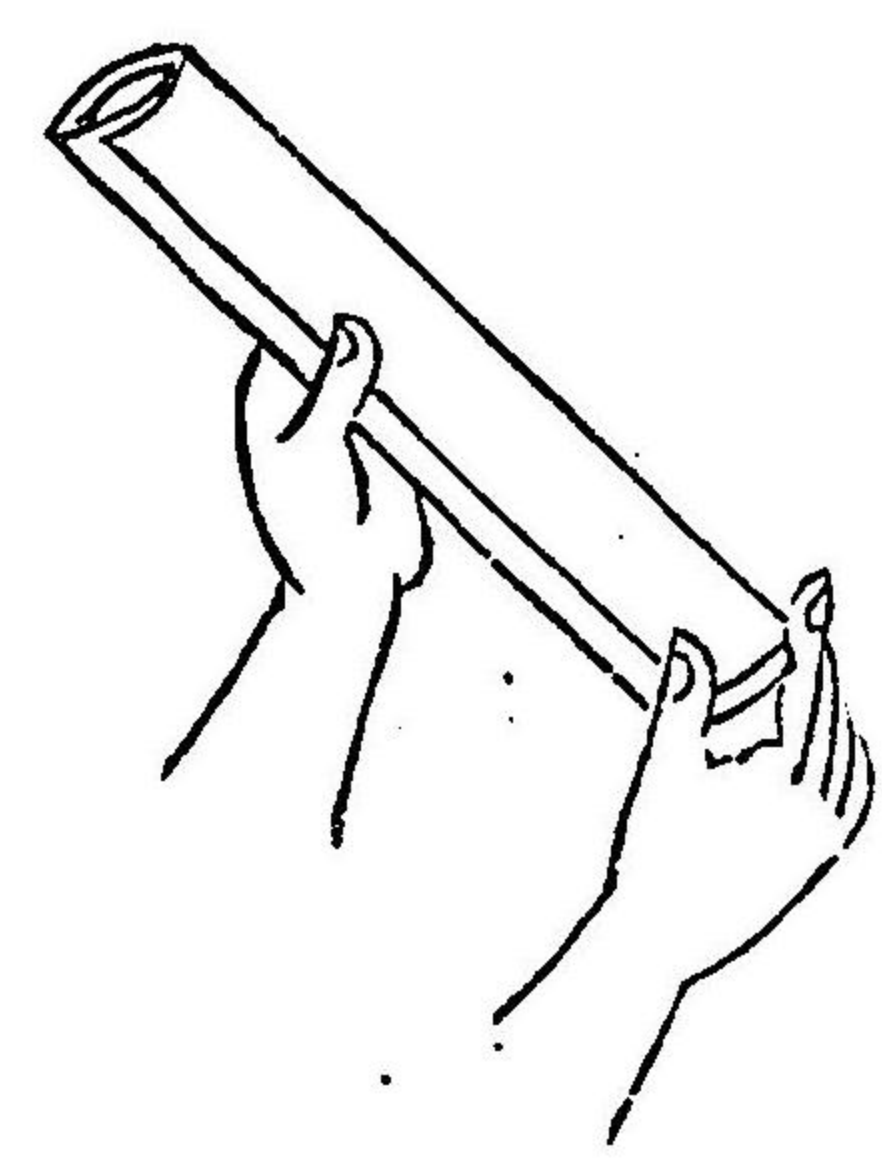
意にして試むへし然して先方確に持居ると知らは右手を引くへし鼻頭よ  
せされを過ちありて大なる不体裁を生ず注意すへし三方は總て鼻頭よ  
り少しか、高めは捧げ持ちを要す氣 献饌長之を受取り案の上に献  
るなり 神饌案は据付の前のなき時は献饌長以下進 ○ 手長あらは立  
ちて運ふも膝行向ひ合ひても神前にてはなす方よる坐しとす  
凡て神饌は受取る前並に渡せし後は共に必一揖すへし  
献饌長は一臺獻る毎に一步半膝退いて小拜すへしひ手の  
を床につく献り終らば皆元の如く千鳥並に龜居し長以下  
互に見合せ笏を持ち一揖して末坐の手長より漸次起て  
一揖本坐に復し正笏す神饌長起つ時より献饌終りて本  
坐に復するまで樂を奏すへし

次齋主神前に進み祝詞

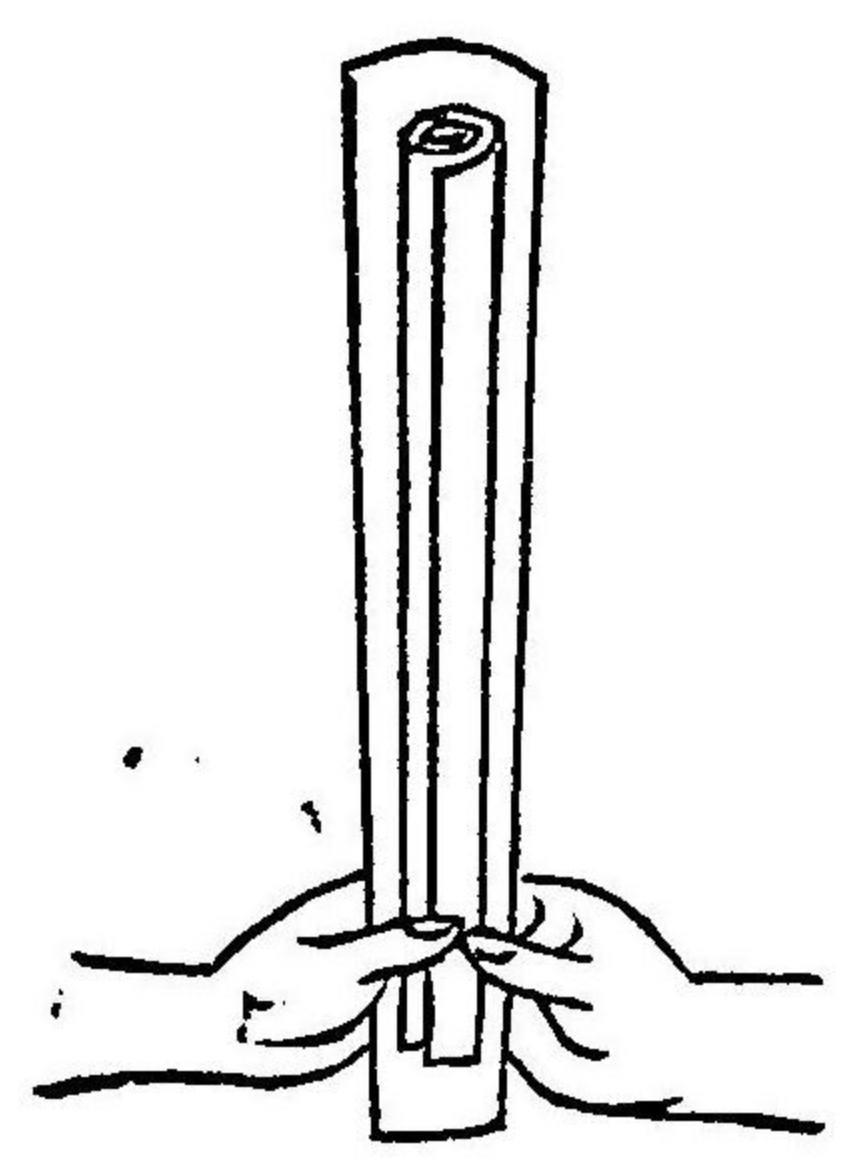
齋主一揖して起ち正笏祝詞座の三尺計り前にて一揖座  
して左足よりして左右左と三足膝行して進み座に着き  
一揖す後取正笏一揖起ちて齋主の左腋に随ひ進みて二  
尺計り下りて座し齋主の一揖するを見て左右左と三足  
膝進いて齋主の左腋に就き笏を右に置き祝詞を懐中よ  
り出し左手に持ち右手を添へて齋主に渡すへし渡す終  
らは笏を取り三足膝退いて祭官と共に平伏し奉讀終ら  
は又進みて笏を右に置き左手を伸へ祝詞を受取り右手  
に持ち替へ懐中して笏を取り立ちて本坐に復し正笏す  
へし後取なき時は祝詞は懐中し祝詞坐よて右齋主祝詞を左の手  
にて取り笏に持添への手にて取出し奏し終りて懐中すへし両手にて捧げ笏は頭目より高二拜

して笏を右の傍に置き祝詞を左腋にて開き正面に捧げ  
て二つに折り左手を上にし右手を下にし小拜し終りて  
之を復開きて奏す奏し終りて又正面にて二つに折り小  
拜し左腋にて巻き笏を取り笏に持添へて二拜し祝詞を  
右手に持ち後取に授け後取受取りて笏を右傍に置き手を  
四つ拍ち笏を取りて小拜し一揖して膝退し起ちて一揖  
し本座に復し正笏す凡そ祝詞を奏するには呼吸を調へ然て聲を  
大音に奏すへし然らされは長き祝詞は奏し終へぬもの  
なり注意すへし又齋主自己の姓名は必微音に奏すへし

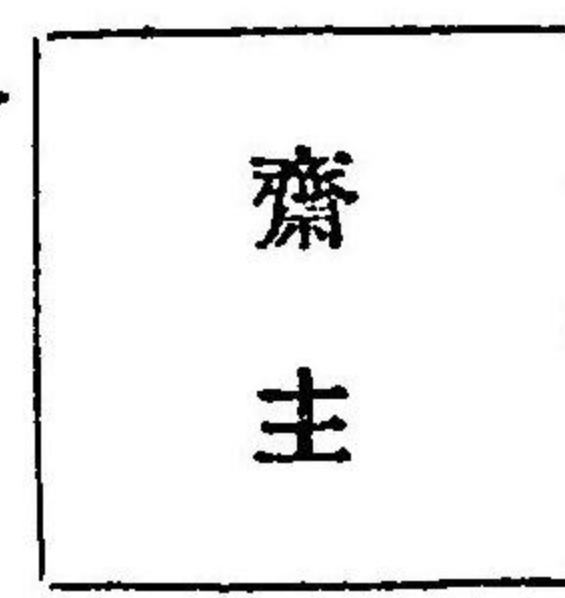
後取祝詞を  
持つ圖



祝詞を笏に取  
添へ持つ圖

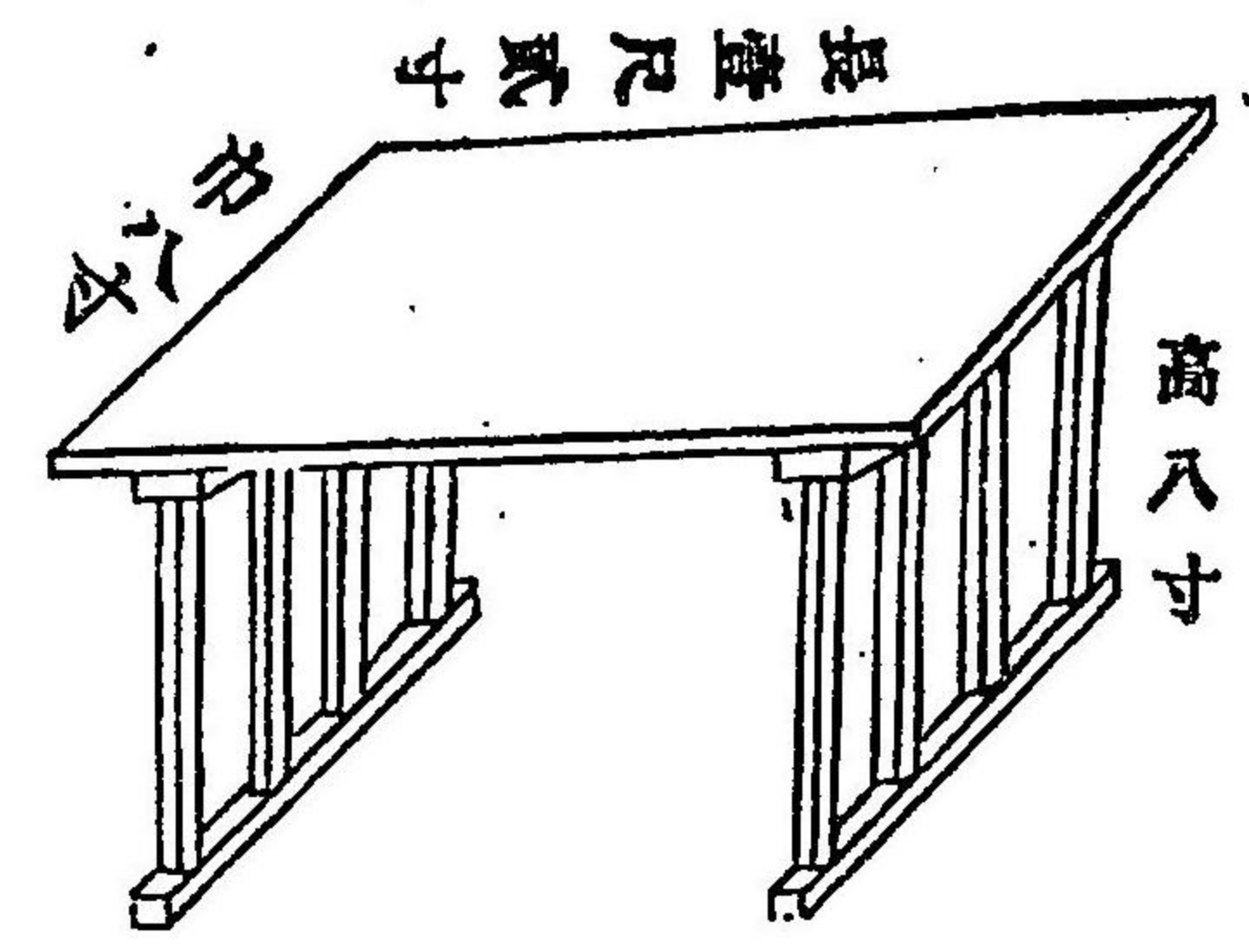


着座の圖



次後取玉串案を神前に設く  
後取一揖座を起ち玉串案仮置の前に至り一揖して笏を  
懷中し左の手にて案の下を持ち右の手にて右側の案脚  
を持ち神前階下に至り座して案を置き笏を取り一揖し  
て本坐に復し正笏す

玉串案之圖



次齋主玉中を奉り拜禮玉中は後取傍に就て之を附と

齋主一揖して進み拜坐に着し小拜す後取一揖進て飯案に置たる玉串の前に至り一揖笏を懐中し玉串を左の手を上にして右の手に取り齋主の傍に就きて持替へて左の手に下にして右の手に上にして齋主に渡し齋主一揖して受取れば後取笏を取り一揖して退き本座に復し正笏す齋主笏を懐中し玉串を取り正面に持ち一揖して起ち豫め設けたる玉串案の前三尺位の所にて一揖して座し膝進し左右三足持替て神の本を神前の方へ向け右手にて案上に置き笏を取り小拜膝退し拜坐に復し再拜拍手し起ちて一揖し本座に復す郡市長等の参向あらは此次に拜禮せしむへし

次副齋主以下拜禮

祭官一同又は一人二三人つゝ各玉串を持ち玉串は略するも妨げなし神前に進み献りて拜禮但齋主の拜座より凡三尺計り下に着座すへしすると齋主の所作に同し二名以上の時はすへて進退とも合圖を以て拜禮するをよるしどす其方先笏を身の中央に寄せ左手を以て笏の下をもち右の手を以て笏の頭一寸計り下を向の方より平に之を持つ笏の本を右の側に突立後方に下け落す二の無名指と小指とを以て笏を抱へ大指と中指を座につけ差置くなり此時音をなす是列座の人一同拜禮をなす合圖なり又之を取時を人指をかけ町村長等参向あらは此次に拜禮せしむへし

次後取進て玉串案を撤す

後取進み出て玉串案を撤するの作法は供する時の式に  
より之を反對にするのみ

次献饌長以下神饌を撤す此間奏樂

献饌長及手長のもの一揖して起ち先の位置に着き笏を

懷中一互に見合せ一揖す献饌長一揖して最後に献りし  
神饌より順次に撤す其作法は凡て献饌の時に同一撤すへしかへ畢  
て笏を取り一同一揖末坐より起ち一揖本坐に復して一  
揖正笏す音樂を奏せると  
献饌の時と同し

次齊主小拜御扉を閉つ再拜拍手諸員此間奏樂  
平伏

齋主副齋主一揖座を起ち神前階下ニ進み一揖して昇階  
本坐の前にて小拜齋主副齋主左右に別れ膝進配祀の前  
に到り小拜して左右配祀の扉を閉つ開扉の時膝退して本  
坐の前に至り御扉を閉ち  
開扉は左扉を先にする  
を閉扉は右を先にする膝退再拜拍  
手一揖して階を降り本坐に復し一揖凡て諸作法開扉の時  
同しく或は反對にする

とわり其心得あるへし諸員平  
伏奏樂等は開扉の時に同し

次各一揖退出

諸員一同一着座のまゝ一揖し齋主より一人つゝ起ち神  
前に向ヒ一揖し順次に退出す

庭上尋常祓式

祓式豫め高案に大麻盥湯  
を置き下に薦を敷く

先齋主以下祓戸に列立す

齋主以下正笏して立つ席次其他渾て殿上式に同  
し

次祓主祓の詞を白す

祓主一揖ちて立ち高案の前に進み小拜し再拜拍手小拜  
して笏を左手に持ち右手を懷中へ入れ祓詞を取出し笏  
に持添て開き讀白す終りて巻き笏に取添へ小拜し笏を

左手に持ち右手にて祓詞を懷中すへし扱再拜拍手小拜して退き本床に復すへし進退拍手祓詞の卷方等殿上式に同じしければ畧す參照すへし

次大麻行事

大麻者一揖して高案の前に進み小拜して笏を懷中し大麻を取り我左の方を上とし右の方を下とし先神饌所に到り右の方を上とし左の方を下に持直す又持行時と拂ふ時と左右上下をかへさまにするは以下同じしければ略す神饌を左右左と祓ひ次に齋主以下の前に至り左右左と祓ふ終りて大麻を高案の上に置き笏を取り小拜し本床に復し一揖す何れも立ながら祓ふへし

次鹽湯行事

鹽湯者一揖して高案の前に進み小拜して笏を懷中し鹽湯の壺を取り両手にて持ち先つ神饌所に至り鹽湯の

壺を左の手に持ち右の手にて櫛の小枝を取り鹽湯にひたして左の方へうき又ひたして右の方へうき又左の方へうきとくこと前の如し齋主以下うき終て壺を高案の上に置き笏を取り一拜して本床に復し一揖す祓ひのさまえ前に同じ

次退出

齋主以下一同一揖して齋主より神前に進むへし

庭上尋常祭典式

先齋主以下祭場に着床

着床正笏等其他渾て殿上式に倣ふへし

次開扉

齋主一揖して立ち神前の階下右の方我方左に進み一揖して沓を脱ぎ斜に階に昇り先我右の方に向き横に濱縁に着坐一揖し再拜膝行して笏を懐中し御扉の左の方我方右に平伏小拜して御鍵を懐中より取出し御錠を開き先左の御戸を開く成るべく開き終て小拜深く謹みて御戸の右の方我方左に膝行して右の御戸を開き終て笏をとり平伏小拜濱縁に復坐し再拜拍手終て始の如く階を下り沓を着け一揖して復床副祭主ありて配祀の開扉等ある時の進退作法渾て殿上式に同じければ器するにより各條とも參照すへ

次神饌を供す

神饌長一揖して立ち神前階下右の方我方左に進み一揖して沓を脱ぎ斜めに階を昇り我方右の方に向き横に濱縁にて小拜し神前の右の方我方左にうづくまり居るべし

次神饌次長の者進むと神饌長に同じ但し階の中間に跪き居るへし若し階卑くければ階下に立ちて磬折すへし磬折とは笏を臍に當て腰を少しく折りて居るを云下倣之

次傳供の者次第に進み列立磬折し居るへし但し神饌を受取らんとするとき笏を懐中すへし列立神饌受渡の位置作法渾て殿上式に倣ふへし下之に同じ

次に神饌所より神饌を操出すを次第に傳送す傳送し終らば笏を取り一同一揖末席の者より復床すへし

次に神饌長は階の中間に居ながら笏を取り小拜して下り沓を着け一揖して復床す

次に神饌長も笏をとり小拜して階を下り沓を着け一揖して復床す

次祝詞を奏す

齋主立ち一揖して神前の階下に進み再拜して祝詞を奏

す以下殿上式に同じ奏し終て再拜拍手一揖して復床す  
後取祝詞を祭主に手次く作法も亦殿上式に同じ

次玉串案を置く

後取一揖床を起ち玉串案仮設の所に至り一揖笏を懐中し玉串案の下に左の手を入れ右の手にて案の脚を持ち神前階下に据へ笏を取り一揖して復床

次齋主玉串を奉り拜禮

玉串は後取傍に就て之を附す其式殿上式に同じけれを参照すべし

齋主一揖笏を懐中して玉串を受取り正面に持ちて階下に進み一揖玉串の本の方を神前の方にして案上に奉り笏を取り拜座に退き立て笏を懐中し再拜拍手又笏を取り一揖して復床し一揖

次各拜禮

其時々便宜に任すへし(殿上照式)

次玉串案を撤す

撤すること置ときの如く但し之を反對するのみ下之に倣へ

次神饌を撤す

献饌のときに同じ

次閉扉

開扉の時に同じ

次退出

齋主以下一同一揖を齋主より一名つゝ神前に向ひ一拜を退出す

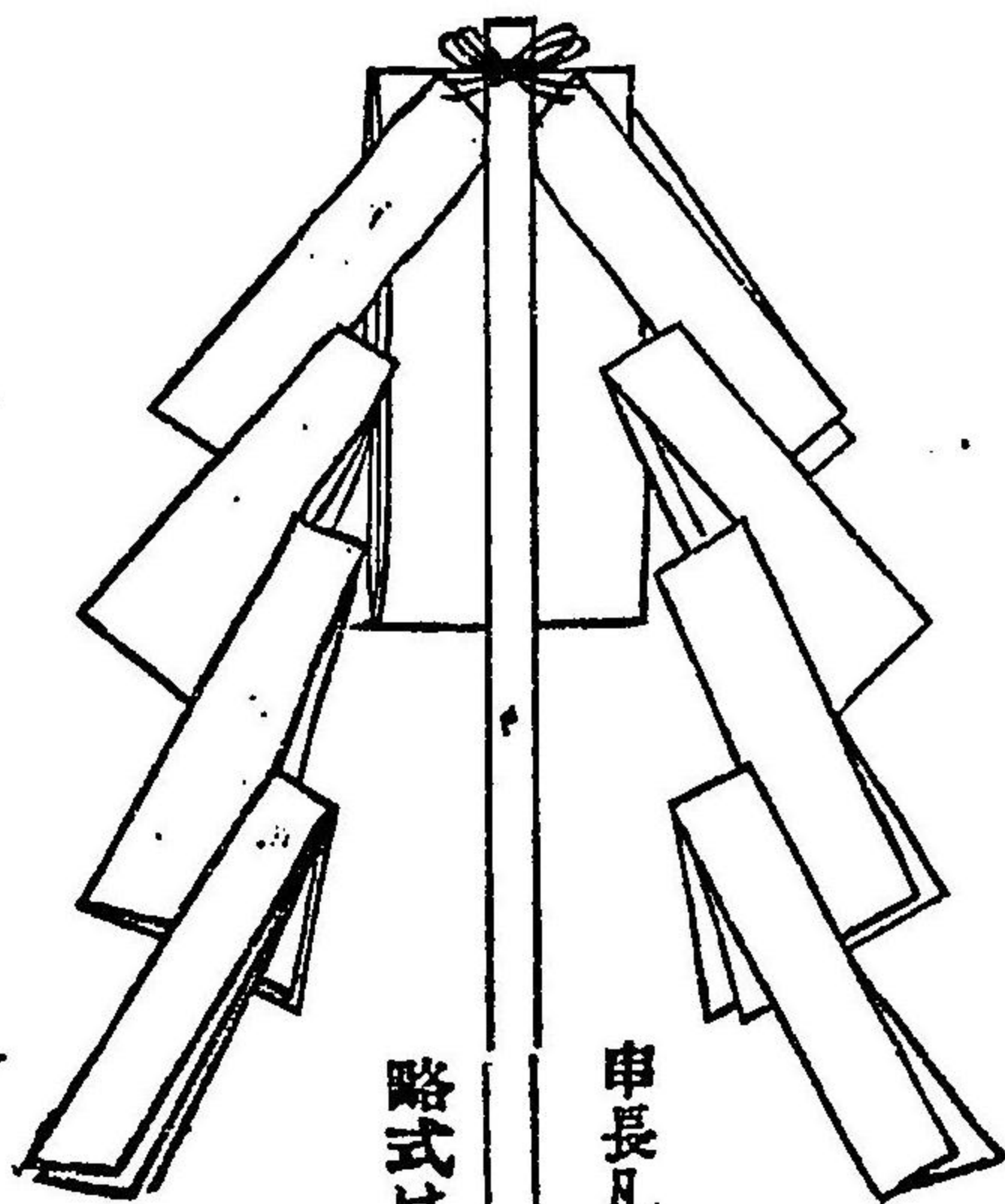


奉幣式

凡そ幣は神に奉る物なり本式は絹布錦布絲麻或は金銀珠玉何物に限らず之を奉る其法布を以て之を包み麻を以て束ね結ふて案上に置き之を奉るなり上古には凡案の制もき故に木の末又は竹の末に狭み之を奉りたり今切幣を竹に狭み奉るは其遺法なり參社の人幣を奉らんとする時は私亭に於て調へ從者に持たしめ參社之を捧げ兩段再拜了りて神職に渡し社殿に奉らまむ又幣料を神職に送り調達を誂ゆる時は其人社參神前より進む時神職之を調へ件の幣を從者又は主人に渡すへきものなり官祭には金幣を奉らるゝにより別に作法なければども尙從來の儘幣串を獻らん社にては此作法によるへ長官齋主

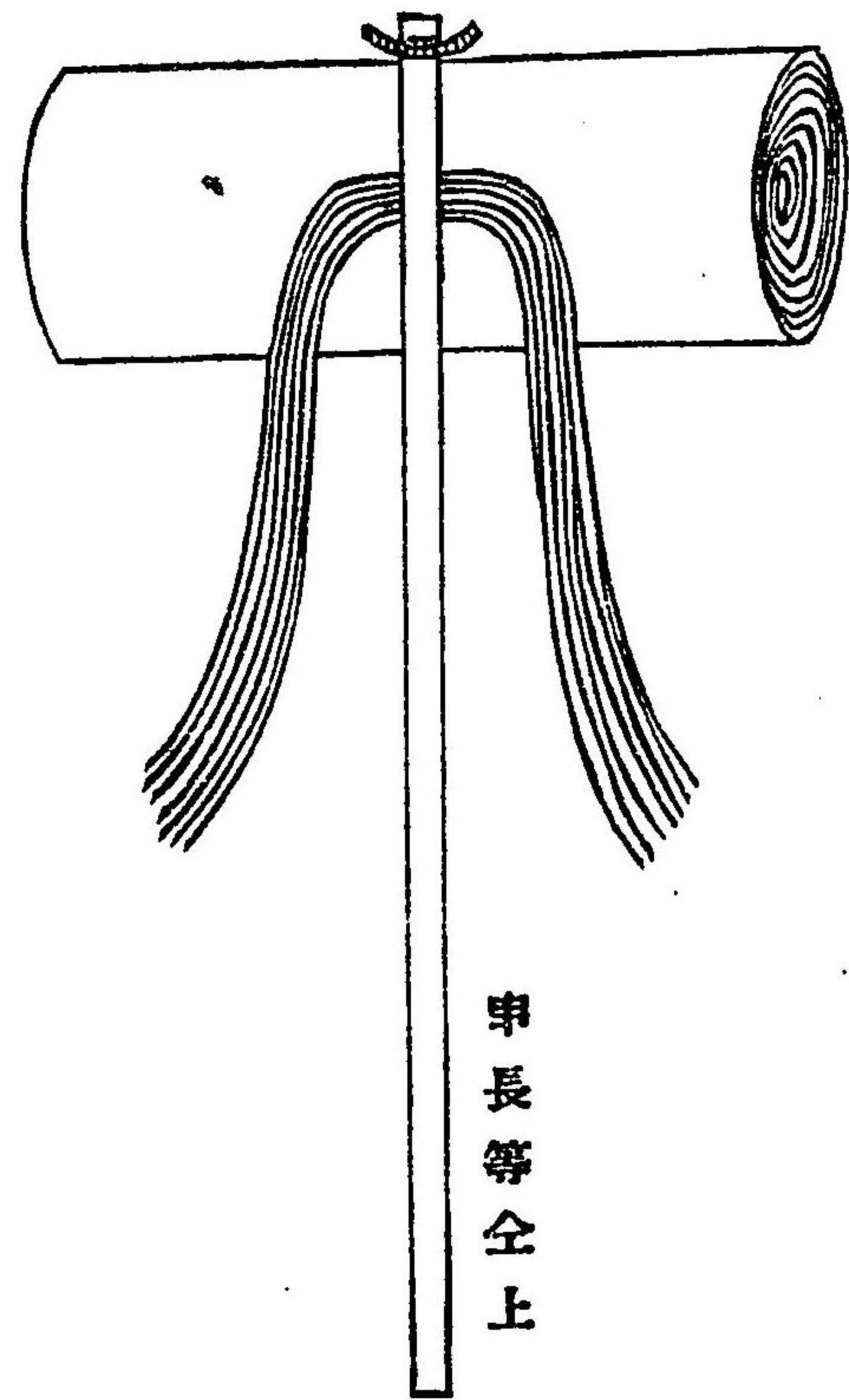
なれば次官奉幣者となり首座の主典或は取幣使を勤むへきれと時宜よりて長官にて奉幣者となり又一人にて幣使とも兼ねて奉幣式を行ふも妨げな

奉書或は  
荒板紙を  
以て作り  
たる通常  
切幣の圖



申長凡三尺五寸槍は白木を用ゐるへし  
略式は篠竹を用ふるも可なり

五色絹白布各  
五尺を重ね巻  
きて串は狭み  
麻を取垂て、  
作りたる本式  
幣の圖



串長等全上

但し中心にせんか紙を入れ巻くへし然らされは体義よろしからず

先奉幣者着坐常之如し  
奉幣者沓揖座揖正笏等常の如くす敷設役坐を持出て敷  
くこと祝詞座は同一祝詞座の説あらは別に敷幣使隨行同志

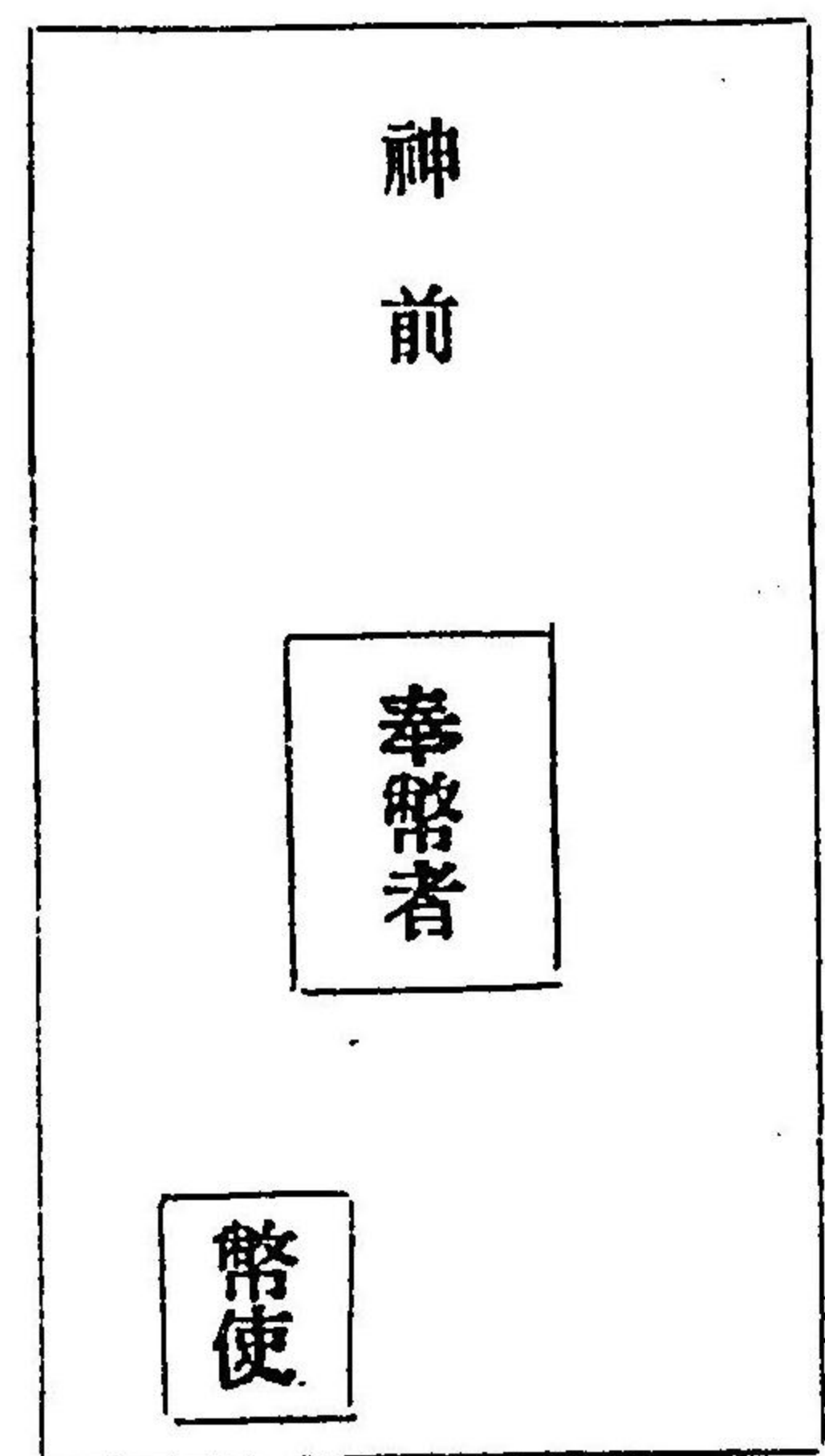
く神前へ進み奉幣者の左側三尺計り下に着座一揖正笏  
す

次奉幣者小拜二度一揖

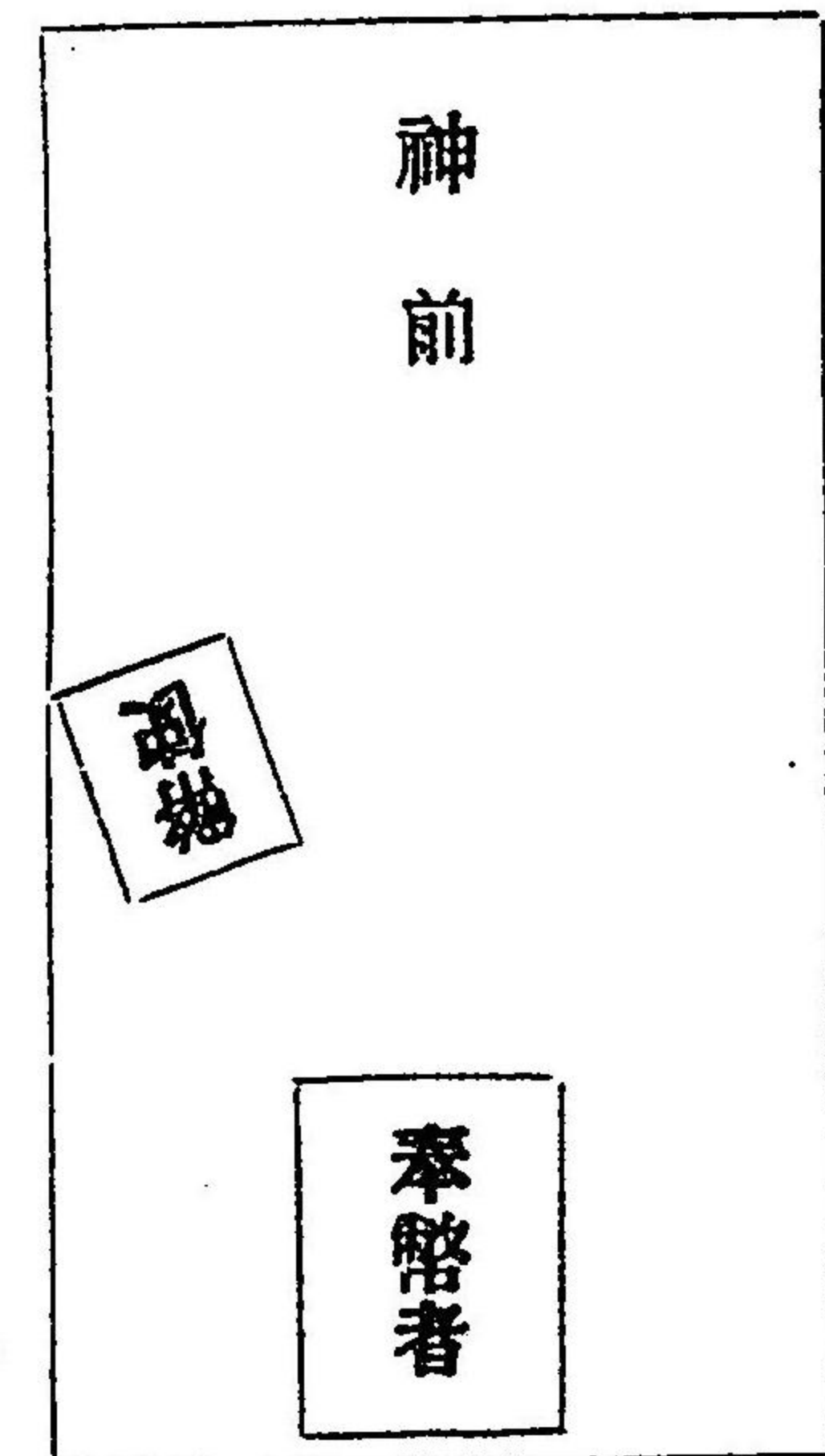
奉幣者着座の儘小拜二度をなして一揖し笏を右の傍に  
置く此際適宜幣使一揖起坐幣串仮置案の前に到り一揖  
笏を懐中へ幣串の七分位の處を左手にて執り右手にて  
串の本を持ち左方へ斜に奉幣者の前左傍に就き居  
幣串を持替へ右を上本の方を差出し渡し笏を取り一揖し  
て木座に退き着く奉幣者は幣串の下を右の手にて取り  
左の手にて中間を持ち幣串の首を左の方に向く

但し幣串は兼て便宜に所よ案を置  
き其上に輒せ修祓を行ひたくへし

着坐之圖



幣串を渡すの圖



次奉幣者小拜立て幣を左右左と振り座して平伏又立て幣を左右左と振り平伏す  
 奉幣者右の手に幣串の下を持ち左手に幣串の中間を持ち幣首を左にし直立兩足を踏揃へ幣を正面に捧げ左足を少しく引て幣の首を左に振る半身亦之に従ふ但し顔を

は正しく神前に向け居るへ下背之は倣ふへし次に左足を本所に踏反次に右足を少し引て右に幣首を振る半身之に従ふと上に同じ次に右足を本所に踏反次に左足を少引きて幣を左に振ると上の如し以上左右左と振りたるなり次に左足を本所に踏反し幣を正面に持ち捧げ直ちに先つ右足を膝き次に左足を膝き幣は正面に立て平伏す此時幣の表を神前に向くへし次起立先左足より立ち右足を後にす兩足を踏揃へて幣を正面に捧げ左右左と振りて平伏すると初めの如し

次祈請

幣串の左を上凡そ祈念のとたる其祭事の要点と實祚無窮國中にて祈念すへしに持つと初めの如し頭を垂れ身を屈め心中にて祈念すへし家安全等のとを祈念すへし但し簡單を要す

次奉幣者再拜初めの如し

先小拜直立幣を左右左と振り平伏す如此く二度するこ  
と總て初の如し以上併て四拜なり

次幣使進て幣を受て神殿に献す

幣使初めに幣を渡したる席に進み一揖笏を懐中す奉幣

者幣を持替へ右を上幣使に授け笏を取り一揖す幣使受

けて左を上起ちて神前に進み階の昇降等は總て殿上膝進凡そ式に倣ふへ今略之

して神饌案の前に座し持替へて右を上立て之を奉り膝退

同笏を取り一揖退下

次幣使返祝拍手奉幣者之に應え拍手す

幣使幣を受取たる席に就き奉幣者に向ひて笏を置き手

を拍つこと二つ奉幣者同く一揖笏を置き相應して手

を拍つこと二つ但し幣使の二度めの拍手と奉幣者の初

度の拍手と合せて拍つへし之を合拍手と云ふ返祝詞とは今幣を神前

に奉りたる由を奉幣者に告るの儀あり終て幣使笏を取り一揖して本座より復す

次奉幣者小拜二度一揖起座退下幣使之に従ふ

奉幣者笏を取り居なから小拜二度一揖して起座左足より立つへ

一揖して退下す幣使之に習ひ拜揖をなす退下す但幣使は着座の時

と同く何つもの奉幣者より三尺扱幣を奉るの時期は神饌ある計り引下りて之を行ふものとす

とき神饌の後祝詞の前に行ふへし神饌なくして幣は

かり献るときは先幣を奉り而して後其由を祝詞にて奏

上すへし又幣串は神饌と共に撤却するか便宜案上に暫

く奉り置くも妨げなきものとす若し切幣五色絹布等に

あらずして金銀珠玉の類にて串に狭みかたきものは神

前に高案を設け神饌案の外に其幣物を案上に奉り奉幣者再拜  
両段幣使返祝詞合拍手等をなすこと本式に倣ひ取捨し  
て行ふへい

奉幣式終

直會略式

直會は舊來其式ある神社は其式に隨ふへし又本式は略  
式なれば之により適宜斟酌執行ふへし

祭官一同祭場退出直會殿に着く

祭官一同着座のまゝにて一拜し順次に一揖し起ちて直  
會殿にいたり座に着く圖面の通り直會殿は社務所など便

宜の所にて行ふへしさて座に着かは正笏安坐すへい  
俗に云ふあり  
らをかあり

次一獻

先つ撒いたる神饌の御酒を甕一對にうつり入れ又洗米  
を土器二枚に盛り三寶二臺にのせ榊の葉を一枚つゝ洗  
米の土器に添へ置く後取者二人盃一杯つゝをもち齋主  
副齋主の前に進み跪て其盃を進む齋主副齋主笏を置き  
盃を受取て一揖す盃をもちし者退く次に左右の座に後  
取一人つゝ甕をもちて一箇進み御酒を酌む齋主副齋主  
其盃を捧げ飲み終りて懐中より疊紙を取出し盃又盃を出す又  
酌む齋主副齋主其盃を酒を入れ次の人に附し笏を取り一  
揖す次の人一揖笏を置き下其盃を受取捧げて飲み終

り又盃を出す後取酒を酌む其盃を酒を入次の人へ附す次にみな同じさまにて終りの人飲み終り盃を下に置き笏を取り一揖す此時盃をもち次に一同正笏して一揖す後取進みて其左右の盃を取り退く

次御饌を進む

後取者二人三寶一盃をもち左右に置く齋主副齋左右一揖笏を置く後取者榲の葉をとりて米をすくひて出す齋主副齋主手を出して受喫す次々皆同し終りの人喫し終る此時三寶をもち

次一同正笏して一揖す

次二獻

總て其式一獻の式に同し

次發歌

あのみきをわかみきからずやほとがる云々  
歌をうたふへし或は東遊などもよろし

次三獻

總て一獻の式に同し

次退手を拍つ

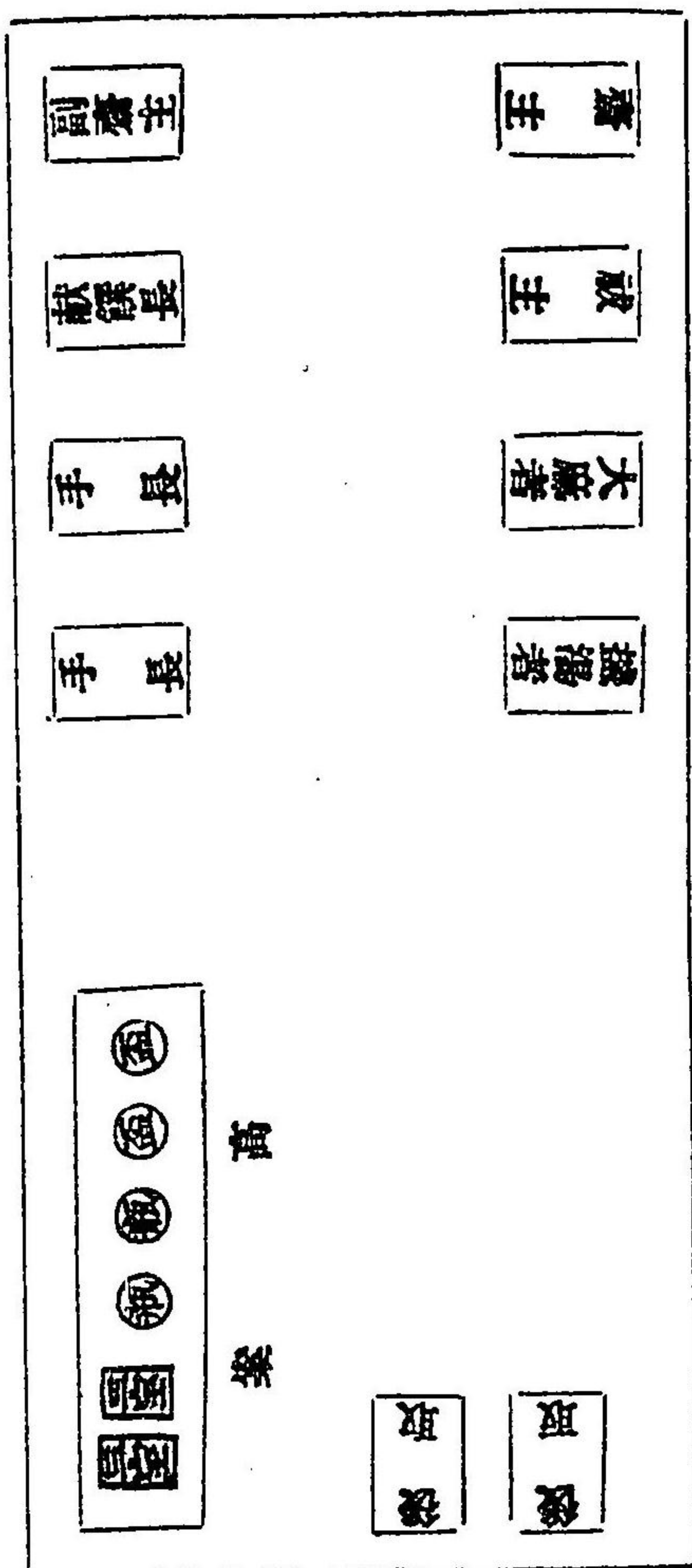
一同笏を下に置き手を二つ拍ち正笏して一揖す

次退散

齋主より一揖して退く次々皆同し

直會着座

の圖



直會略式終

明治廿九年十月廿四日印刷  
同 年十一月一日發行

定價金貳拾五錢

編輯者兼  
福岡縣筑前國粕屋郡香椎村大字香椎  
千二百七十二番地士族  
木下美重

編輯者兼  
同縣福岡市福岡養巴町五十二番地士族  
勝屋茂彦

印刷者  
同縣同市福岡橋口町二十六番地平民  
吉田友吉

發行所  
同縣同市福岡大工町八十六番地  
福岡縣神職取締所

